

Hara Museum of Contemporary Art

Press Release 2011/1/28

「Be Alive! 一原美術館コレクション」

2011年1月14日[金]—6月12日[日] 原美術館 [東京・品川] *終了会期変更・確定しました



[図版 1]
奈良美智 「Eve of Destruction」
カンヴァスにアクリル絵具 2006年

原美術館(東京都品川区北品川4-7-25 〒140-0001)は1979年12月の開館以来、常に<現在(いま)>第一線で活躍する作家たち、あるいはこれからの活躍が期待される若手の作家たちとの、出会いと交流を大切にまいりました。

今回の「原美術館コレクション展」では、「Be Alive!」—現在(いま)、この瞬間、生きろ、元気に行こう—をキーワードに、21世紀に入って10年が経過した<いま>、まさに生き生きと第一線で活躍中の作家たちによる表現を所蔵作品の中から選りすぐり、展覧いたします。

「個人の感性、個性を大事にして継続してきたことが、原美術館コレクションの特徴」(館長・原俊夫)と言えます。当館において企画展の開催、あるいはコレクションの収集時に最優先されるのは、ひとつひとつの作品と真摯に向き合う<この瞬間>の感動です。それは、作家の国籍や人種、性別はもとより、既存の価値観に基づくアートの潮流にも囚われない、私立美術館としての自由意思の表明でもあります。また、作家や鑑賞者の皆さまと同時代の視座に立ち、「新しい価値を共に創造してゆくこと」は、当館の基本方針でもあるのです。コレクションは当館の姿勢を顕著に伝える顔であり、また開館から約30年の歩みを映し出す鏡とも言えるでしょう。

【出品作家】

加藤泉、ウィリアム ケントリッジ、東芋、田幡浩一、奈良美智、名和晃平、ピピロッティ リスト、やなぎみわ、森弘治、森村泰昌、ほか (会期中にギャラリーIの展示替えを行なう予定です) 出品点数=約30点

【開催要項】

展覧会名 「Be Alive! 一原美術館コレクション」
会期 2011年1月14日[金]—6月12日[日]
(プロジェクト「ミカリーン トーマス:母は唯一無二の存在」2月17日[木]—6月12日[日]/ギャラリーIにて併催)
主催/会場 原美術館 東京都品川区北品川4-7-25 〒140-0001
Tel 03-3445-0651(代表) Fax 03-3473-0104(代表)
E-mail info@haramuseum.or.jp ウェブサイト <http://www.haramuseum.or.jp>
携帯サイト <http://mobile.haramuseum.or.jp>
ブログ <http://www.art-it.asia/u/HaraMuseum>
Twitter <http://twitter.com/haramuseum> (アカウント名 @haramuseum)
開館時間 11:00 am-5:00 pm(祝日にあたる5月4日を除く水曜日は8:00pmまで開館)

HARA
MUSEUM

入館は閉館時刻の30分前まで)

- 休館日 月曜日(祝日にあたる3月21日は開館)、3月22日
- 入館料 一般1,000円、大高生700円、小中高生500円/原美術館メンバーは無料、学期中の土曜日は小中高生の入館無料/20名以上の団体は1人100円引
- 交通案内 JR「品川駅」高輪口より徒歩15分/タクシー5分/都営バス「反96」系統「御殿山」停留所下車、徒歩3分。毎週日曜のみ、品川駅高輪口より無料ミニシャトルバス「ブルンバツ！」を運行(協賛 ブルーム バーグL. P./アーティスト 鈴木康広/詳細はウェブサイトをご覧ください)
- ギャラリーガイド 日曜・祝日には当館学芸員によるギャラリーガイドを実施(2:30pmより約30分)

【広報用図版】

掲載時には必ずクレジットをご記載ください。またトリミング、文字乗せはご遠慮ください。



[図版 2]



[3]



[4]



[5]

- [図版1] 奈良美智「Eve of Destruction」キャンバスにアクリル絵具 2006年
- [2] やなぎみわ「寓話シリーズ グレーテル」ゼラチンシルバープリント 2004年
- [3] 加藤泉「無題」キャンバスに油彩 2006年
- [4] 名和晃平「PixCell-Bambi #2」ミクストメディア 2006年
- [5] 束芋「につぼんの台所」ビデオインスタレーション 1999年(作家寄託)

【本展についてのお問い合わせ】

原美術館 松浦・野田(広報)/青野(本展担当学芸員) Tel 03-3280-0679 Fax 03-5791-7630 (いずれも広報直通/掲載の際には代表番号をご掲載ください。) E-mail press@haramuseum.or.jp <原美術館および別館ハラ ミュージアム アークはブログおよびツイッターで情報発信中。> <http://www.art-it.asia/u/HaraMuseum> [@haramuseum](http://twitter.com/haramuseum)

[主な出品作家と作品について]

加藤泉 (1969年-・島根県生まれ)

武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業。人物像をモチーフに生命と存在の根源にふれるような力強さに富んだ絵画と彫刻を制作。2007年にはヴェネツィアビエンナーレ展の企画部門へ出品。2010-11年箱根彫刻の森美術館で個展開催中(2011年1月30日まで)。なお原美術館においては、2007年ダイムラー・ファウンデーション・イン・ジャパンの文化・芸術支援活動の一環で約3カ月間ベルリンに滞在の後、2008年に『「アート・スコープ 2007/2008」—存在を見つめて』にて成果を発表。

【本展出品作品】 絵画(「無題」2006年)1点、人と植物の融合を思わせる彫刻数点を紹介。

ウィリアム ケントリッジ (1955年-・南アフリカ生まれ)

ヨハネスブルグの大学で政治学を学んだ後、パリのエコール ジャック ルコックにおいて演劇を学ぶ。1980年代から木炭とパステルの素描をコマ撮りしたアニメーション作品を発表。祖国のアパルトヘイトの歴史など社会や人間が抱えるさまざまな問題を、深い洞察とやわらかな詩情を交えて描き、多くの若手作家に影響を与える。1999年ヴェネツィアビエンナーレ、2001年横浜トリエンナーレ他多数の国際展に参加。2009-10年、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館にて個展開催。ニューヨーク近代美術館他世界の主要な美術館に個展が巡回中(2011年まで)。2010年第26回京都賞受賞。

【出品作品】 「Memo」1993年。素描と実写を融合させた映像作品(東京・京都で開催された個展に出品)。東京の原美術館における初展示。

束芋 (1975年-・兵庫県生まれ)

京都造形芸術大学芸術学部デザイン科情報デザインコース卒業。膨大な手描きの原画をコンピューターに取りこむ手法で制作したアニメーションを映像インスタレーションとし、現代社会の諸相を浮き彫りにする。2001年横浜トリエンナーレ出品ほか、国際展出品多数。2006年原美術館にて個展「ヨロヨロン」を開催。2010年横浜美術館、国立国際美術館にて個展開催。2011年ヴェネツィアビエンナーレに日本館代表として出品が決定している。

【出品作品】 「こっぼんの台所」1999年(作家寄託)／卒業制作として発表された束芋の出世作。日常生活の中にひそむ違和感、現代日本社会がはらむ病巣を、どこか懐かしさを感じさせる筆致と北斎の浮世絵から採用した色彩で描き出した。当館では個展以来の展示となる。

奈良美智 (1959年-・青森県生まれ)

愛知県立芸術大学絵画科油画修士課程修了後、ドイツの国立デュッセルドルフ芸術アカデミー修了。ドイツ留学時の孤独と焦燥感を発端として自らの内面へと向かい、子供が併せ持つ清純な繊細さと強靱なしたたかさを独特な筆致で描き出す。2001年横浜美術館から全国巡回展、2003年クレーブランド現代美術館から全米巡回展等、大規模な個展多数。2004年に原美術館にて開催された「From the Depth of My Drawer」は東京から全国、ソウルへ巡回した。世界各国のグループ展や2009年アジアパシフィック現代アートトリエンナーレほか、多数の国際展に出展。2010年信楽焼の手法でセラミックの立体作品を発表。

【出品作品】 「Eve of Destruction」2006年／同年、青森県弘前市で開催された大規模な個展に出品された中の一点。ベトナム戦争時の反戦歌をタイトルにしたこの作品は、現在も地球上のどこかで繰り返される戦争への強いメッセージをはらむ。作家のアトリエをイメージした常設インスタレーション「My Drawing Room」(2004年8月-／制作協力:graf)は、2010年秋に期間限定のクリスマス仕様に変更、今後も時折模様替えの予定である。

名和晃平 (1975年-・大阪府生まれ)

京都市立芸術大学院博士課程修了。在学中、英国王立美術院に交換留学し、彫刻を学ぶ。彫刻の“表皮”に注目し、ガラスビーズやプリズムシートを使って彫刻の事物としてのリアリティを問い直す作品を制作。その他、さまざまな素材を通して鑑賞者・彫刻・空間の関係性を探究している。2010年バングラデシュビエンナーレでは最優秀賞を受賞。原美術館においては、2006年ベルリンに約3カ月滞在の後、2006年『「アート・スコープ 2005/2006」—インターフェース・コンプレックス』にてその成果を発表。

【出品作品】 「PixCell-Bambi #2」2006年／デジタルメディアによる情報化時代における「もの」の実感を問うような作品。無数のガラスビーズは小鹿の形態をあらわしているが、じっと眼を凝らして観察すると、その中に「ほんもの」の剥製があるの見える。

やなぎみわ (兵庫県生まれ)

京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。1993年に京都で初個展、96年より海外の展覧会にも参加。写真や映像を用いながら、常に女性を主題にした作品を制作。制服を着た若い女性をモチーフに、現代の都市とそこでの消費文化における「記号としての女性」を取り上げた初期作品「エレベーターガール」シリーズで一躍注目を集めた後、若い女性が自らの半世紀後の姿を演じる写真作品「マイグランドマザーズ」シリーズ、実際の年配の女性が祖母の思い出を語るビデオ作品「グランドドーターズ」を発表、日本のアートシーンを代表する一人となる。2004年丸亀猪熊弦一郎現代美術館で個展を開催。2005年原美術館にて「無垢な老女と無慈悲な少女の信じられない物語」開催。2009年国立国際美術館にて大規模な個展開催、同年ヴェネツィアビエンナーレ日本代表。

【出品作品】 「寓話シリーズ エレンディア」2004年(写真)、「砂女」2005年(映像)ほか、少女と老女の物語をテーマにした計6点を紹介(原美術館における個展の出品作品)。